

曲亭馬琴『漢楚賽擬選軍談』翻刻（四）
-第二編その1-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2020-11-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神田, 正行 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21237

曲亭馬琴『漢楚賽擬選軍談』翻刻（四）——第二編その1——

神田 正行

凡例（摘録。詳細は本誌五三九号（平成31年）掲載の、本稿（二）参照）

- 一、仮名は一部を除いて、現行のひらがなに統一した。また、会話を示す「」や、句読・濁点などを適宜補った。
- 一、読み誤りのない範囲で漢字を宛てた。その際、もとの表記を傍訓で残したものもある。また、原本における振り仮名（小字双行の場合が多いが、稀に傍訓もある）は、一部を除いて省略した。
- 一、本文には、内容にもとづいて適宜段落を設けた。また、話題が改まる位置に、内容を示す見出しを、◆印に続けてゴシック体で掲げた。
- 一、挿絵は本文の近い位置に掲げ、画中の詞書は同じ頁の下段に翻字した。
- 一、影印ならびに翻刻の底本は、早稲田大学図書館蔵本（ハ13306。改装本）である。虫損や着彩、シミなどが目立たないよう、画像には最低限の修正を施した。

(七)

漢楚賽擬選軍談第二編序

每編八卷合本四冊
上下二帙每帙二冊

和漢將相の行狀得失、相似たるもの往々これあり。木曾義仲は、楚の項羽に似たり。さばれ義仲は、勇悍膂力、項羽に及ばず、忠信器量は、項羽に優れり。何となれば、義仲粟津の敗軍に、疲勞て奮勇の気力なし。被たる薄鉄の鎧たも、「日属には似ず重し」といへり。項羽は垓下の敗軍に、漢の十將軍を殺虜けて、人なき境に入るが如し。只その虞氏と相訣る、愛惜悲歌の趣は、義仲京師を退くとき、松殿々下の姫うへと、別を惜るに相似たり。是より先に義仲の北陸七ヶ国を略せしとき、頼朝その功を忌て、既に確執に及んとしけるを、義仲これと争はず、且いへらく、「平家の大敵いまだ亡びず。しかるを今仇冤を討ずして、親族と戦んは、わが志にあらず」とて、その子清水冠者を買としつ。加 旃初諸源の起りしは、高倉宮の令旨によれり。義仲これと思ふをもて、その御子信濃宮を主として、皇位に即

奉らんと欲せしに、上皇許し給はねば、義仲いたく憤恨みて、遂に不臣の罪を得たり。又項羽は吝て、功臣に与へず、約に背きて劉邦を、蜀漢に藩に就しめ、義帝を立て主としながら、終にこれを弑したり。是に由て觀るときは、義仲は勇悍膂力、楚の項羽に及びかたく、項羽は、忠信義仲に劣れり。又おもふに、頼朝は、武略洪運、粗漢高祖に似たり。しかれども寛仁大度は、頼朝漢高祖に及ばず。漢高は、よく陳涉が庶を立て、秦を亡すの嚆矢たる、その功を賞したり。尔るに頼朝は、頼政の子孫に恩敦からず、頼政は是頼朝と、同宗にして漢高と、陳涉の類にあらず。その妬忌あまり有て、賞罰正しからざることを知るべし。日漢高祖は、劉氏にあらざれば王とせず、その兄の子を初として、親族を、みな大国に封じたり。頼朝は則然らず。叔父を滅し弟を殺す、罰重くして賞鮮し。譬は彼章魚の、足を映ふて腹に充るを、快しと思ふが如し。足踏るときは身も亦斃る。悲きかな。議論かくの如くなれども、こゝには漢楚の趣に、做ふて勘定を合するのみ。そを好とする永寿堂が又この二編

を鏡かがみんとて、請求こひたまむること急いそなれば、聊いささかこれらの言ことを叙ついでで、
虚実まかひの界あかを明しすことしか也。

文政十二年己丑春正月吉日刊行

曲亭馬琴識

印 (乾坤一艸亭図)

《略注》

◆被たる薄鉄うすてつの鏡かがみ↓「木曾殿、鏡踏張、弓杖衝テ、今
井二宣のたまひケルハ、「日来ハ何ト思ハヌ薄金ガ、ナドヤ
ラン、重ク覚ル也」ト宣ヘバ、」(『源平盛衰記』卷
三十五「粟津合戦」。中世の文学『源平盛衰記』第
六巻、二〇六頁。平成13年、三弥井書店)。流布本
『平家物語』のこの場面に、「薄金」の語は見えない
ので、馬琴が念頭に置いたのは『盛衰記』の記述で
あろう。

◆項羽は垓下の敗軍に↓『通俗漢楚軍談』卷十二「九
里山十面埋伏」に、項羽が「八人の大将」を相手に
奮戦する描写が見える。

◆虞氏と相訣る、愛惜悲歌の趣↓『通俗漢楚軍談』卷

十二「項羽悲歌別虞氏」に詳しい。

◆松殿々下の姫うへと↓『源平盛衰記』卷三十五「木
曾貴女の遺を惜む事」参照。

◆頼朝その功を忌て↓『源平盛衰記』卷二十八「頼朝
義仲悪事」参照。

◆約に背きて劉邦を↓懐王は項羽と劉邦に、「早く咸
陽へ入りたる者を王とし、後に入る者を臣とせん」
(『通俗漢楚軍談』卷二)と命じ、結局劉邦が項羽
に先んじて咸陽に入城した。しかし項羽は、霸王と
称して秦を滅ぼし、権柄を握って劉邦を漢王に封じ
た(同書卷三)。

◆義帝を立て主としながら↓懐王(義帝)は、項羽の
意を受けた英布により、長江で殺害される(『通俗
漢楚軍談』卷五「項羽江中弑義帝」)。

◆陳涉が庶を立て↓「高祖時、為陳涉置守冢三十家
塲」。至「今血食」(『史記』陳涉世家。和刻本正史)。

《二丁裏・二丁表》



擬漢大將軍韓信 源九郎判官 義経
かんのたいせいぐんかんしんたをせんぶ げんくわんはうくわんたしる
そのとくわいてつになをせりふ
 擬楚人蒯徹 常陸坊海尊
そのくんしんはんちやくしなをせりふ だいちぼうかうかくわい
 咲すぎて散際わろし八重桜 [印] (蕨) [印] (笠)
 ▼義経の華々しい活躍と、その悲惨な末路を詠んだ
 ものである。

骨折し甲斐なき秋の扇かな [印] (玄) [印] (同)
せり せり
 ▼覚明の失脚を詠んだものである。つ。
そのたいせうくわんそにをせらふ たでのうぐりうみた
 擬楚大將桓楚 楯六郎親忠
そのくんしんはんちやくしなをせりふ だいちぼうかうかくわい
 擬楚軍師范增 大夫坊覚明

《二丁裏・三丁表》



擬楚大将季布 勇婦鞞絵
 擬漢大将夏侯嬰 和田小太郎義盛
 すさまじき女は夜の柳かな [印] (信天翁)

▼義盛は「御教書」を手にする。

功成山子 功成名遂げて退く案山子かな [印] (鸚鵡)

▼「功成り名遂げて身退く」は『老子』に見える文句で、ここでは張良の処世をあらわす。
 擬漢留侯張良 前斎宮次官親良
 擬楚武信君項梁 権頭中原兼遠

《三丁裏・四丁表》



擬 鴻門 会 樊 噲 武 藏 坊 弁 慶
 這 段 出 於 第 三 編
 除 乞 に ま だ あ け ぬ 戸 を 御 慶 かな
 印 (雷) 印 (水)

擬 楚 項 伯 長 瀬 判 官 代 義 定
 擬 楚 項 莊 越 後 中 太 能 景
 這 段 出 於 第 三 編
 師 走 かな 疱 丁 研 の 二 人 まで 印 (愚 山 人)
 ▼ 図 なら び に 贊 は、 鴻 門 の 会 に お け る 剣 舞 を 踏 ま え
 る。

◆頼朝、信濃宮のもとへ伺候する

さてその後、兼遠【項梁】・義仲【項羽】は、大夫坊覚明【范增】を――軍師として、その謀に從ひ、高倉宮の御子なりける、信濃宮【楚懷王】を馬籠の城へ、迎ひ取り奉りて、これを主君と仰ぎまゐらせ、城中に御所を造りて、尊敬し奉る、もてなし大方ならざりける。この事近国に隠れなかりしかば、平家の苛どき、政に苦しみたる、遠近の郷士・浮浪人、野伏・山客に至るまで、招かざるに馳せ集まる者、一万余人に及びしかば、兼遠・義仲喜びて、「さらばまづ、近郡・隣国を討ち取らん」とて、押し寄せ、攻めけるに、その勢ひ破竹のごとく、攻むるに勝たずといふ事なければ、信濃一國を平均して、飛騨国まで討ち從へけり。「この勢ひを抜かずして、北陸道を討ち取らん」とて、その勢およそ三万余騎、兼遠・義仲兩大将にて、馬籠の城より出陣す。

かゝる所に誰とは知らず、一手の軍馬二万余騎、上野国の方より出で來たりて、此方の城へ近付きければ、兼遠・義仲驚き怪しみ、早く物見の兵をもて、事のやうを

問はするに、件の大将は別人ならず、○中へ／＼○上より

先兵衛 佐頼朝【劉邦】也。先に高倉宮の、令旨に應じて義兵を起こし、山木判官兼隆を討ち滅ぼして、石橋山に旗を挙げたりしに、平家の方人、大場・股野らが為に、攻め破られて船路より、上総國に落ちとゞまり、彼処の兵を駆り催して、かく大軍になりたり。よりにて会稽の、恥を清めんと思ふ程に、木曾殿は、信濃宮を守り立てまゐらせて、北國を攻むる由、その聞えありしかば、今より共に力を合はして、平家を滅ぼさん為に、家臣北条時政【呂文】、大江広元【蕭荷】、三好善信【曹參】、この余味方の、勇士を率いて出で、▲右の下へ／＼▲左の中より來たれる由、こと分明に聞えしかば、兼遠・義仲喜びて、しばらく出陣の義を止め、すなはち頼朝主従に對面せんとす。

その時覚明馬乗り進めて、向かひ遙かに見渡せば、年なほ若き一人の大将、萌黄緘の鎧に、白地の錦の直垂を着下し、黄金造りの大刀を、鷗尻に帯びたるが、廿四插したる征箭を背に負ひ、重藤の弓の、握り太なるを左手



(4ウ・5オ 頼朝、馬籠に來たる)

に脇挟み、りんせん ▲「連銭」カ「葦毛の、太く逞し
き三才駒に、雲珠鞍置いてゆらりとうち乗り、数多の士
卒を従へて、次へ (4ウ・5オ) / 白旗のもとに立たり

仲 (義仲) 「招かて集まる一家のよしみ。戦の首途
重畳々々。

とほ (兼遠) 「同じ源氏の白旗也とて、油断は大敵、

〇 / 〇子細を尋ねん。隊伍を乱さず控へい。

かく (覚明) 「ハテ目覚ましき佐殿の行装。白氣の
奇特は目の当たり。天の許せるこれ英雄。それ
かあらぬか何にもせよ、快からぬ雲氣じやよな
ア。

とき (時政) 「木曾殿も城中より、只今出陣と見え
まする。しばらくお迎へ遊ばしませ。

とも (頼朝) 「いまだ子細を告げざれば、疑はる、
事もあらん。皆々無礼のなきやうに、後陣へ下
知を伝へよ。

▼頼朝の頭上に瑞雲が描かれる。

ける、威風まことに辺りを払つて、世の英雄と見えたりける。只これのみにあらずして、一道の白気かの大將の、頭かぶの上より閃ひらめきのほりて、白光はくわく人を射る如く、陰々いんくとして見えしかば、覚明驚き怪しみて、「あの大將は問はでも知るき、兵衛ひやうゑ佐頼朝さよりちかならん。この人武徳備はりて、神と人との助けを得たり。終つひに六十余州を討ち平らげて、武家の棟梁となりぬべし。しかりとも、我誤つて、木曾殿どよの、招きに応じたるものを、今さら誰たれにか従ふべき。事に臨みてかの人を、討ち取るべし」と思案をしつゝ、しきりに嘆息したるのみ、口に言はねば覚明が、心を知る者なかりけり。

◆信濃宮、頼朝・義仲を競わせる

○さる程に兼遠・義仲は、頼朝に対面して、親族の喜びを述べ、迭かたみに義兵復讐ごころせしの、志こころを説き明かし、「しばらく人馬の、足を休め給へ」とて、城外に陣取らせ、その後「宮に拜謁あるべし」とて、義仲は頼朝を伴ふて、かの御所へ参る程に、頼朝は軍兵を、
 ▲右の下へ／＼
 ▲左の上より陣中に残し置き、手勢はづかに、百人余りを従へ

て、城中へ赴く程に、兼遠はそがま、城下に、陣取りて城に帰らず、義仲まづ御所に参りて、宮みやに云々と聞こえ上げしかば、宮の御喜びおん喜び大方ならず、御装束おんせうぞくを改めて、頼朝に御対面あり。宮の御乳人おんめのと、佐貫介重秀さぬきのすけしげひで【王社長】これを披露す。すなはち「御盃おんさかずきを、賜はるべし」と仰により、重秀の妻磯鳥いそとり【衛氏】、御酌おんしやくに侍りけり。

その時義仲申すやう、「頼朝石橋山の二へ続く

(5ウ)



(5)ウ・6才 頼朝、信濃宮に對面する

(二)

敗軍の後、安房・上総へおし渡りて、二万余の兵を得た

とも（頼朝）「御本意を遂げさせられず、隠れさせ

給ひし御父上の、御志を空しうせじと、思ひ

奉る我々まで、先立つてより義兵の旗挙げ。義

仲と示し合はして、平家を討たん軍義の為、

遙々参上、仕りましてござります。

仲（義仲）「頼朝味方に参りては、百万騎に

も勝れる勢ひ。お喜びあそばしませ。

いそ（磯鳥）「我々までもこのやうな、喜ばしい事

はござりませぬはいなア。

みや（信濃宮）「義仲といひ頼朝といひ、世に頼も

しき清和の嫡流。早く都へ攻め上りて、

平家を滅ぼす者をもて、武家の棟梁といたすべ

し。後に違背のなからん為、誓ひの盃用意々々。

ひで（重秀）「かく英雄の参会も、まことに御運めでたき吉相。ありがたい義でござります。

御運めでたき吉相。ありがたい義でござります。

り。よりに再び渡海して、此所へ参りし由は、宮に見参りし奉らん為、且義仲が北国征伐を、助けん為に候」と、事の心を告げ奉れば、宮はいよ／＼喜び給ひて、いと頼もしく思し召しけり。

かゝる折から、東海道へ遣はし置きたる、忍びの軍兵一兩人、帰り来て申すやう、「先に兵衛佐殿の、安房・上総へおし渡りて、二三万の味方を集め、さらに東国を、討ち従へんとせらる、由、都へ聞えたりしかば、平家の執権、秦木工頭長高【趙高】、にはかに十万余騎の、兵を起こさしめ、又佐殿を討たんとて、敵の大軍都を發ちて、

▲右の下へ

▲左の上より

駿河国まで押し寄せ來

つ、藤沼のほとりに陣取つて、安房・上総の様子を窺ひ、軽々しくは進み候はず」と、言葉等しく告げしかば、義仲これをうち聞て、「しからんには佐殿は、これより東へうち向かひて、駿河の敵を追ひ払ひ給へ。それがしは、北陸道を討ち従へて、共に都へ次へ（6ウ）／＼攻め上らん」と、言ふに頼朝一義に及ばず、「しからんにはそれがしは、身の暇を給はるべし」と、言ふに義仲

心得て、宮に向かひ奉り、「平家の大軍、駿河路までうち出でたりといふ、注進の候也。かゝれば頼朝馳せ向かひて、討ち散らし候はずは、東国は味方のものにあらず。早く暇を賜へかし」と、申すを宮は聞こし召して、しばし御髪を傾け給ひ、「事かくの如くならば、兵衛佐は東海道なる、敵を討たん事勿論たるべし。つきて又我思ふ由あり、義仲・頼朝は従兄弟同士にて、親しき源氏也といへども、対面は此度がはじめならん。かくて又、東北に別れなば、親しみさらに絶え果てて、他人に等しき事もやあらん。願ふは只今義を結びて、兄弟となりぬかし。されば義仲は北陸道、頼朝は東海道より、逃ぐるを追ふて攻め上らんに、誰にもあれ

▲左へ

▲右より

いち早く、都まで攻め上りて、平家を滅ぼしたらん者、すなはち武家の棟梁たるべし。この義に違ふべからず」と、敵かに聞え知らして、義仲と頼朝に、盃を取り交はさせ、義を結ばしめ給ふにぞ、義仲も頼朝も、宮の賢しくをはします、御計らひを等しく感じて、一義に及ばず

▲左の上より

言承けしつ、矢を折り天地を伏し拝み



（6ウ・7オ 藤原宗義、参陣する）

て、「宮の仰せし趣を、守るべし」とぞ誓ひける。

かくて頼朝は忙はしく、もとの陣所へ退く時、兼遠に由を告げて、義仲らに相別れ、二万の手勢を従へて、駿河路を指して急ぎけり。

むね（宗義）「数ならねども某は、□／＼高倉宮の

御恩を受けたり。御陣の尻に、従つて平家を討たば、死するとも恨みなし。御賢察下されよ。

仲（義仲）「初めを忘れぬあつばれ忠臣。宮もさこそは御満足。此由披露○／＼いたすでござらふ。

遠（兼遠）「万卒は得やすくして、一将は得がたし。宗義味方に参られしは、思ひがけなきこれ幸ひ。

まづく／＼休息○／＼いたされよ。

ひら（兼平）「聞及びたる廷尉の来臨。めでたい義でござります。

ゆき（行家）「只今城を守る者の、少なき折によき方人。何から何まで不思議な手都合。戦の勝利

疑ひなし。

◆藤原宗義、信濃宮に出仕

さる程に兼遠・義仲は、「東海道の敵の寄せ手は、頼朝うち向かふたれば後ろ安し。とく北国へ攻め入らん」とて、再びうち出でんとする折から、先に高倉宮に従ひ奉りし、檢非違使藤原宗義〔宋義〕といふ者、残兵を駆り集めて、久しく近江の、次（6ウ・7オ）／山中に隠れりたりしが、義仲の信濃宮を、守り立て奉りし由を伝へ聞て、その手の兵、三千余人を従へつ、馬籠の城に到着し、味方に加らん事を望みしかば、兼遠・義仲対面して、古主を忘れぬ、忠信の心ばへを褒めて、その手の兵らを勞ひ、過ぎ来し方の物語して、その胸中を探りしに、野心あるべうもあらざれば、兼遠・義仲談合して、宗義に言ふやう、「和殿は遠路を来給ひければ、さこそ人馬の疲れけめ。此度は馬籠の城を守りて、宮を守護し給ふべし。重ねての出陣に、必ず先手を頼むべし」と、言ふに宗義否みかねて、「それは本意にあらぬ事ながら、城中に残る軍兵の、少なしとあるをいかゞはせん。されば行くも留まるも、皆これ忠義の為なれば、仰に従ひ候

はん」と、言ふに兼遠喜びて、すなはち宗義とその手の兵を、城中へ遣はしつ、佐貫介重秀、常盤目 常成〔虞公〕らと共に、をさく城をぞ守らせける。

これにより宗義は、宮に拜謁奉りて、しばらく城を預かる程に、高倉宮の御由縁とて、人々尊敬してければ、自ら勢ひづきて、宮の権臣になりにけり。

◆頼朝・義仲、おのおの進軍する

さる程に兼遠・義仲は、越後より進み入りて、北国を討ちけるに、戦へば勝ち○／○攻むれば取る、勢ひ当たるべうもあらざれば、越後には城 太郎いへ長、加賀には戸樫 介有のぶ、右の下へ 左の中より 林六郎 光明ら、兜を脱ぎ弓を伏せ、皆々降参してければ、加賀・能登までうち靡けて、国府に ■ 逗留したりける。

是より先に、駿河路までうち向かふたる、平家十万余の軍兵は、敵の虚実を測りかねて、藤沼のほとりに陣を連ね、なす事もなく日を送る程に、頼朝は甲斐国より、兵をおし進めて、駿河路にうち出でつ、しばらく対陣する程に、その夜藤沼の水鳥の、一度にはつとたちける

羽音に、平家の軍兵驚き騒ぎて、「スハ夜討ちこそ入たれ」とて、取る物も取りあへず、皆散り散りに逃げ失せければ、平家の◇／◇大将維盛・知度、景高・盛俊ら、これを制するに暇あらず、逃ぐる味方に引たてられて、遂に都へ逃げ帰りぬ。

か、りし程に都には、北国の早馬、櫛の齒を引くがごとく、兼遠・義仲の大軍、すでに北国を討ち靡けて、加賀の国府に屯をなす由、注進定かなりければ、秦・長高、驚きながら深く包みて、宗盛【胡亥】には聞え知らせず、主命也と偽りて、さらに又三位の中將、維盛を惣大將として、三河介知度を副將とし、侍 大將には、越中次郎兵衛尉盛俊と、飛驒判官景高、この余齋藤別当実盛など、宗徒の士卒、十万余騎を起こさしめ、兼遠・義仲の討手として、北国へぞ遣はしける。

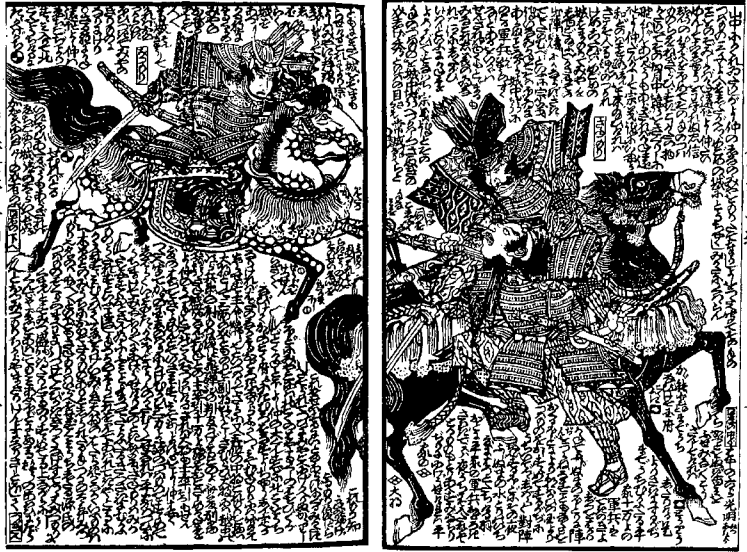
されば大將も士卒も、先度の恥を清めんとて、勇み進みて押し寄するを、義仲早く伝へ聞て、加賀國篠原に駆け向かひ、三万余騎の兵を進めて、しばらく挑み戦ふ程に、運の傾く癖なれば、平家は遂にうち負けて、皆散り

／＼に逃げ失せけり。

◆実盛奮戦

この時齋藤別当実盛は、味方をやすく落とさん為に、踏み止まつて戦ふたる、切つ先に向かふ者、討たれずといふ事なし。手塚太郎これを見て、「あはれ敵や」と馬にかく入れ、進み向かひて声をかけ、「いみじき大將の働きかな。かく言ふ者は、木曾殿の身内において、さる者ありと知られたる、手塚太郎光盛也。名乗り給へ／＼」と言へども、実盛は応へをせず、組み討ちしたる源氏の兵を、鞍の前輪に引つけて、首かき切つて投げ捨てつ、又光盛に組まんとす。光盛「得たり」と馬乗り進めて、馬上ながらに引組んで、ヤ声を合はして揉み合ふ程に、両馬の間にだうと落つ。光盛力や勝りけん、上になり刺し通して、**次へ**（アウ・オオ）／＼抑へて首を取つたりける。

かくて戦果てて後、光盛は件の首を、義仲の、実檢に入れて言ふやう、「某先に、心得ぬ敵を討ちたり。老人かと思ふに、鬚髭は皆黒かり。錦の直垂を着たれば、



(7ウ・8オ 手塚太郎、斎藤実盛に挑む)

大将ならんと思へども、続く士卒もなし。すなはちこれ

で候」と言ふ。義仲はその首を、と見かう見つ、眉を擧

め、「これは斎藤実盛ならん。実盛は元来、源家譜代の

侍也。平治の戦ひに義朝討たれし後、重盛に従ふて、

長井の庄の別当に、補せられたる者ぞかし。その老いた

るを隠さんとして、鬢髭を染めたるか。洗ふて見よ」と言

はるゝに、光盛やがて池水にて、件の首を洗ひしかば、

黒きは墨もて染めたるにて、皆白髪にぞなりにける。か

くて義仲は、生け捕りたる平家の士卒に、実盛が錦の直

垂を、着たる由を尋ぬるに、知りたる者ありて言ふやう、

「今日の敗軍に、実盛『殿をせん』とて、大将維盛に、

錦の直垂を乞ひ申し、『最期の思ひ出に、せまくほし』

と望みしかば、維盛彼が忠勇を感じて、着たる赤地の錦

さね(実盛)「何を小癩な、手並みを見たか。

みつもり(光盛)「あつぱれ働き、功の者。その姓

名を聞かまほし。〇〇勝負を決せん、いざ〜

〜。



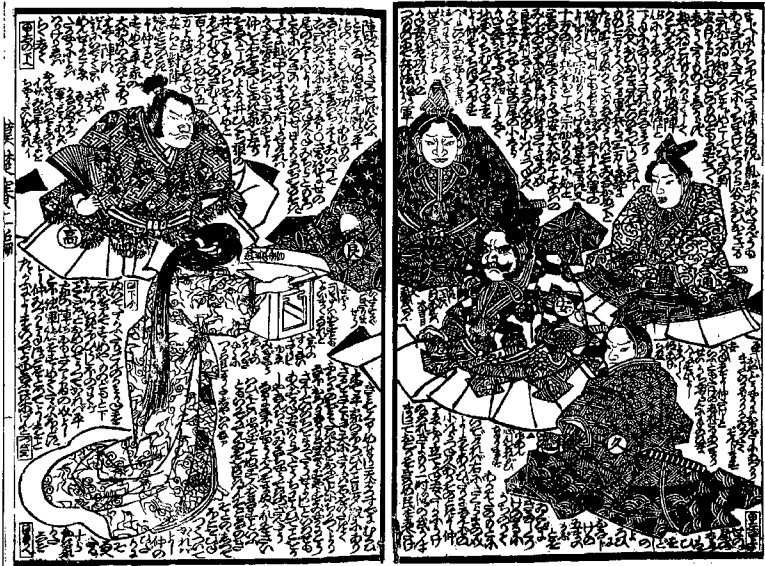
(8ウ・9オ 俱利伽羅峠の合戦)

の直垂たれを、取らせ給ひし」といふ。義仲聞いて深く憐れみ、「実盛はこれ、老功の兵也。彼を味方にいたしなば、万卒に勝るべし。さるを生け捕らざりし事、惜しむべし」と、武勇を褒めて、光盛には、さしたる恩賞なかりける。

◆妹尾兼安、源氏討伐に向かう

○かくて又義仲は、逃ぐる敵の跡をつけて、越中国こくまで来にければ、平家の大軍十万余騎、戸波山たなばに陣を連ねて、再び鉾先を次へ(8ウ・9オ)／交へしに、勝ち誇つたる源氏の鋭気に、当たるべうもあらざれば、又さんぐにうち負けて、俱利伽羅谷へ追ひ落とさる。されば大将、知度ちとをはじめとして、飛驒と判官景高かげたから、宗徒むねとの者ども数を尽くして、討たる、者少なからず。惣大将維盛は、辛くして囲みを逃れ、塩坂の陣に走り入て、盛俊もりとしと一手になりけり。されば戸波、俱利伽羅谷へ追ひ落とされて、

へ戸波俱利伽羅に、平家敗軍の所。細画こまがきなれば詞書なし。○／○この本文は次に見えたり。



(9ウ・10オ) 長高、妹尾らに出陣を命ず

命を失ひし者七万余人、残る軍兵は、三万余騎に足らざるなりぬ。「かくては敵ふべからず」とて、皆おめくと帰洛せしかども、長高はなほ敗軍の由を、隠して宗盛に

通(兼通)「親同様にお見出しに、預かりましていかばかりか、有がたく存じます。

安(兼安)「兼遠・義仲猛しといふとも、たけの知れたる集まり勢。うち破らん hands の暇入らず。

此由よろしく仰上げられ、▲／▲御安心を願ひ奉ります。

良(良遠)「幸ひ明日は大吉日。

久(経久)「出陣いたすでござりませう。

高(長高)「そりやさうなうてはかはなぬ筈。軍功あらば、恩賞は望みのまゝ。イザ御教書を頂戴めされイ。

女房「私は出ずともよい幕なれど、髷の少ない草紙故、御教書の取り次ぎ役に、使はれましたじやはいなア。

告げ知らせず、さらに又、十万の軍兵を起こして、宗盛の下知と称へ、妹尾太郎兼安【章邯】を大将として、阿波民部大夫成良【李斯】の弟、桜間介良遠【李由】、ならびに難波小次郎経久【董翳】、兼安が嫡子、妹尾小太郎兼通【司馬欣】を副将とし、「早く北国へうち向かつて、兼遠・義仲を滅ぼすべし」といふ、御教書を渡しけり。そもく妹尾太郎兼安は、老功の兵にて、兵法軍陣に、通達せずといふ所なし。往ぬる保元・平治の戦ひに、軍功ありし者なれば、長高すなはち選み出だして、此度の大将にしたるなり。

◆兼安、義仲軍と対陣

○さる程に妹尾太郎は、良遠・経久、兼通らと、諸共に戦の首途、せし日より路次を急ぎ、すでに越中国まで押し寄せければ、兼遠聞てちつとも騒がず、義仲を右備へとし、この余今井・樋口・根井・樋、手塚らをはじめとして、宗徒の侍百余人、その勢五万余騎をもて、兼安らと対陣す。

その時義仲馬を進めて、「平家の大将に言ふべき事あ

り。早く陣頭に出でて対面せよ」と、声高やかに呼ばはりけり。しばらくして

○右の下へ／＼○左の上より

妹尾太郎は、緋織の鎧に同じ毛の、五枚兜を猪首に着なし、栗毛の馬にうち乗りて、赤旗のもとに出でければ、右に桜間介良遠あり、左に難波小次郎経久あり。その時義仲声ふり立て、「兼安確かに承れ。清盛一時の武運に任して、騎りを極め民を虐げ、君を苦しめ奉りし、天罰すでに報ひ来て、平家の滅びん事旦夕にあり。さるを悟らで天に逆ふは、石を抱きて淵に臨み、薪を負ふて火に近付くより、なほ愚かなる業ならずや。速やかに降参して、命を全うせよかし」と、言はせもあへず兼安は、からくとうち笑ひて、「ことをかしや汝らは、皆朝敵の残党なるに、なほ誅伐を免れしを、幸ひ也とは思はずして、盗人をなすといふとも、いかでか天意を冒し得ん。そこな退きそ」と罵つて、戈をひねつて突いてか、れば、義仲の左に備へたる十郎行家、刀を

■中へ／＼■下より

抜いて戦ふたり。権守兼遠これを見て、「進めや者ども」と下知しつ、勢ひ潮の湧くがごとく、どつと喚いて撃つてか

れば、平家の陣にも桜間介良遠、諸軍を進めて戦ふ程に、義仲自ら手戈を取つて、良遠と戦ふに、良遠いかでか敵ふべき、逃げんと次へ(9ウ・10オ) / するを逃がしもやらず、背を突かんとする程に、平家の侍 駿河みつ成、馬を飛ばして走り来つ、長刀をうち振りて、義仲に撃つてか、れば、義仲は、良遠をうち捨てて、又みつ成と戦ひしが、しばしもあらずみつ成を、馬より下に突き落とし、雑兵に首を取らして、又兼安を討たんとす。



(10ウ 兼安、行家と争つ)

さる程に兼安は、行家と刃を交へて、五六十合戦ふ程に、行家やうやく腕 乱れて、すでに危うく見えたる折から、義仲自ら助け来て、面も振らず撃つてか、れば、兼安左右に敵を受けて、支ゆる事かなはず、刃を引て逃げ走るを、「汚し返せ」と追つ駆けたり。この時経久・兼通らは、今井・樋口らと戦ふて、いまだ勝負を分かざりしに、兼安・良遠が手より戦敗れて、皆散りぐになりしかば、惣敗軍になりにけり。

この日寄せ手は多く討たれて、五六里 ▲右の下へ / ▼左の上より 退きて陣を取りしが、兼安諸將を招きて言ふやう、「賊軍勢ひ盛んなるに、義仲万夫の勇あれば、力をもつて勝ちがたし。斯様々々に計らは、兼遠ら心驕りて、いよく味方を侮るべし。この油断を窺ふて、短

安(兼安)「年は寄つても兼安が、腕に ■ / ■ 覚えの手戈の切先。ならば手柄に ○ / ○ 受けて見よ。

ゆき(行家)「小癩な広言、▼▲ / ▼▲ その手じやゆかぬぞ。

兵急に取り拉^ひがば、勝たずといふ事あるべからず。この義を心得給へかし」と、言ふに皆々一義に及ばず、「しかるべし」と応^{こた}へつゝ、明日の手分けをしたりける。

■かくてその次の日も、平家はしきりにうち負けて、あるひは三里、あるひは四五里、退かずといふ事なければ、源氏はいよいよ勝つに乗りて、何処^{いづ}までもと追ひ詰めけり。(10ウ)

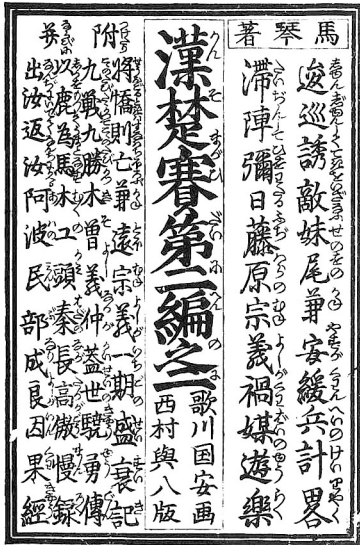
▼第一冊の後表紙封面（奥目録）は、初編第一冊のも
のと同じ。本誌五三九号一〇四頁参照。

《付記》

馬琴風にいえば「編左の余紙」が得られましたので、昨年度でご退職となつた田島正行先生に、お祝いの言葉を書き添えさせていただきます。

同じ西武線沿線にお住まいの田島先生とは、稿者が本学の専任となる以前からのお付き合いです。着任後は、お互いの名前が一字違いのため、書類などが取り違えて届くことも度々ありました。今後はそのような間違いもないのかと思うと、少し寂しく感じられます。

コロナ禍の状況下で、歓送会も開けぬままになっておりますが、いづれ先生ご指定の西武新宿近辺（歌舞伎町ではありません）の会場で、歓会を催したいと存じます。



(表紙)

曲亭馬琴著

和漢撮合／二編上帙

每篇八卷合本

歌川国安絵画

漢楚賽擬選軍談 式

(見返し)

馬琴著

逡巡 誘敵 妹尾兼安 緩兵計略

滯陣 弥日 藤原宗義 禍媒遊楽

漢楚賽第二編之二 歌川国安画 西村与八版

附 將橋 則亡 兼遠宗義 一期盛衰記

九 戰 九 勝 木曾義仲 蓋世 驍勇 伝

以 鹿為馬 木工頭 秦長高 傲慢録

出 汝返 汝 阿波民部 成長良 因果経

◆中原兼遠、命を落とす

(三)

さる程に、妹尾の太郎兼安は、緩兵の謀をもて、わざとしばくうち負けて、日毎に六七里づつ、退きければ、兼遠・義仲勝つに乗りて、これを追ふ事しきり也。兼安遂に追ひ詰められて、越中国、火打城【定陶県】に逃げ籠りて、固く守りて出であはず。

その時兼遠は、義仲に言ふやう、「若殿ばらは野戦に



(11才 才明、偽つて兼遠に降る)

こそ、よき働きもすなれ。城攻めは大事のもの也。木曾殿は覚明らと、共に後陣に控へ給へ。我ら味方を討たせぬやうに、此城を攻め落とすべし」とて、十郎行家を先陣と定め、兼遠自ら、城攻めの大將として、五万の軍兵を三手に分かちて、厳しく城を囲ませける。

か、りし程に平泉寺の長吏、才明といふ荒法師、手勢二百余人を従へて、降参の由を唱へ、兼遠が陣に來にければ、兼遠すなはち、呼び入れて対面す。その時才明が言ふやう、「平家世を取つて廿余年、悪行神仏の憎みに迫り、国民怨みて皆背けり。某ら法師といへども、国恩を報ぜん為に、御勢に加はらん事を願ふのみ。火うちが城の案内は、某かねてよく知つたり。兼安彼処へ逃げ籠もりて、
 ▲右の下へ
 ▲左の上より 固く城を守れども、

才(才明)「敵の虚実を知つたる某。用ひらる、事あらば、御案内いたしませう。

遠(兼遠)「あつぱれ忠節、神妙々々。功によつて寺領坊領、望みに任せん。励まれよく。」

兵糧の貯へなし。緩くとり巻きて日を送り給はゞ、彼ら終に飢へ疲れて、降参せん事疑ひなし」と、言ふに兼遠喜びて、「我もさこそ思ふなれ。しからば緩く攻めよ」とて、城の三方を囲めるのみ、その身は陣中に安坐しつ、酒うち飲んで日を送りしかば、奥九郎義経【韓信】これを諫めて、「頭は何どて、敵を侮り給ふ事の甚だしきや。兼安がしばくうち負けたるは、緩兵の次へ(11オ)／謀なるべし。しきりに勝ちて将着る時は、滅びざる者ある事稀也。いはんや才明が降参、その虚実量りがたし。よくく御用心候へかし」と、言ふを兼遠■／■あざ笑ひて、「そは汝らが知る事ならず。兼安は、勢ひ既に窮まりて、籠の鳥、檻の獸に似たり。今さら何の謀あらんや。幾日もあらで飢へ疲れて、降参せん事疑ひなし。再び口を叩きなせそ」と、いたく叱りて退けけり。

折から覚明は、義仲の使ひとして、後陣より来にけるが、今この事を聞て、兼遠を諫むるやう、「奥九郎は小男にて、年なほ若き者なれども、大将の器量あり。願ふは重く用ひ給へ」と、言へば兼遠頭を振りて、「彼いか

ばかりの智謀あらん。我朝なく、城の■／■方を望み見るに、朝餉の煙次第に細りぬ、これ兵糧の尽くる故也。先生多く言ふ事なかれ」と、応へて用ふる▲右の方へ／

▲左の方より 気色なし。

かくて覚明は、義仲の陣に帰る時、こ▼「二」カの手を守る十郎行家、根井行親、楯親忠らに囁くやう、「大将敵を侮り給へば、恐らく不思議の禍あらん。各々油断すべからず」と、●左へ／●右より 心付けてぞ別れる。

さる程に妹尾太郎兼安は、思ひのまゝに謀り果せて、敵の油断を見すましかれば、「既に時分はよきぞ」とて、ある夜にはかに手配りして、経久・兼通と共に、五六千の軍兵を従へ、桜間の介良遠に城を守らせ、人は枚を含み、馬には拍子をかけて、秘かに城より繰り出だし、兼遠が陣に至りて、しばし様子を窺ふに、守りの雑兵らは皆怠りて、焚き捨てたる、篝火のもとに眠りゐたり。「スハ攻め入れよ」と下知したる、声もろ共に、夜討ちの軍兵、関をどつとつくりかけて、込み入らんとする程に、驚き



(11ウ・12オ 兼遠 討たれる)

騒ぐ○／○源氏の兵、「弓よ馬よ」と罵るのみ、周章大
方ならざりけり。

その際に□印の下へ／□印の中より兼安は、陣屋の
木戸をうち破らせて、経久・兼通もろ共に、馬の轡づら
をおし並べ、まつしぐらに乗り入れて、縦横無碍に攻
めたつれば、討たる、者数を知らず。

通（兼通）「七九のあたりをづぶくく。まだ槍

は○／○ない筈だと、間違へまいぞ、鉦だよ
く。

久（経久）「おいらは大将分だから、馬に乗るべき
□／□筈なれど、こゝへ収まりかぬる故、徒歩
立ちに画組まれた。皆様▲／▲その気で御覧じ
ろ。

才（才明）「味方と見せて裏切りは、つき当てて出
る壱番功名。これでは酔ひも醒めようがの。

雑兵「こいつはつまらぬ雑兵々々。どうせうくくと

聞ゆればよいが。

行家・親忠・行親らは、かねて期したる事なれば、かくても騒ぐ気色なく、逃ぐる味方を罵り勵まして、しばらく防ぎ戦ふたり。

かゝる所に、兼遠が本陣より、猛火忽然と〔次へ〕（口ウ・12オ）／燃え出で、炎八方へ散乱す。煙の内より才明は、手勢二百余人を従へて、手鉾を携へ現れ出で、「妹尾殿と示し合はせて、一杯食はせし、偽降参を真と思ひし、兼遠が愚かさよ。覚悟をせよ」と呼ばり、り、はや奥深く込み入れども、兼遠は酔ひ伏して、退くことも叶はねば、近習の輩助け起こして、肩に引かけて逃げんとせしが、つひに逃る、事叶はず、主従共に枕を並べて、才明に討たれけり。

○兼遠既に討たれしかば、味方はいよく氣を失ひて、防ぎ戦はんとする者なく、逃げ迷ひつ、討たる、者、幾何といふ事を知らねば、行家・親忠・行親らも、既に危うく見えたる折から、義仲は本陣に、火の起こりしを見ていたく驚き、「さては夜討ちの入りたる也。者ども統け」と言ふまゝに、鎧をさつくと投げかけて、腹帯を締

めもあへず、馬にひらりとうち乗りて、はや真先に乗り出だせば、今井・樋口・巴らも、皆遅れじと従ひけり。

かゝりし程に兼安は、後陣より助けの兵の、遙かに走り来るを見て、揚げ貝を吹きて味方を集め、いち早く退きて、城中へ帰り入りしかば、良遠らこれを迎へて、勝ち戦の喜びを述ぶるに、その夜雑兵の討たれしは、百人に過ぎざりけり。

されば又義仲は、揉みに揉んで本陣へ、乗りつけて見れば敵ははや、城中へ退きたる、跡にはなほ、炎のみ盛んなれば、まづ雑兵に下知しつゝ、やうやくに火を消さして、戦のやうを尋ぬるに、行家・親忠・行親らは、義仲に見参して、敗軍の事の趣、且平泉寺の長吏、才明が裏切りによつて、本陣を焼き打ちせられ、あまつさへ兼遠は、才明に討たれたる、一部始終を告げしかば、義仲いたくうち嘆きて、「我は襦袢の内にして、父を失ひしよりこの方、叔父の養育によりて人となりしかば、その恩まことの親より深くして、諸共に事を謀りて、かくは大義を起こせしに、いまだ中途にだも至らで、敵の為に

討たれ給ひし、いと惜しさよ」とばかりに、拳をさすり齒を食ひしばりて、恨みの涙はら／＼と、鎧の草摺を濡らしけり。

樋口・今井・巴らは、皆兼遠が子なるをもて、共に嘆き、且恨みに堪へず、只「速やかに火うちが城を、攻め落とし給へかし。我々先陣を承りて、兼安・才明らを生け捕るべし。急がせ給へ」と勧めしかば、義仲「言ふにや及ぶ」とて、やにはに攻めかゝらんとしてけるを、覚明急に諫めて言ふやう、「味方新たに、大将を失ふて、士卒みな銳気を落とせり。いはんや昨夜の戦ひに、討たれたる者も多く、落ち失せたるも少なからず。さるを一旦の怒りに任して、無謀の戦をし給はゞ、これ盗人に糧をもたらし、仇に刃を貸すが如し。いかでか勝つ事を得べけんや。早く越後まで退きて、由を宮に聞え上げ、加勢の軍兵の至るを待ちて、兼安を討ち給へ。逸り給はゞ過あらん」と、理を尽くして諫めしかば、義仲やうやく怒りを鎮めて、越後まで引退き、覚明に筆を執らして、一通の注進状を書せ、鐔田三郎を使ひとして、信濃へぞ

遣はしける。

◆義仲、宗義を討つ

されば宮は兼遠が、討たれし由を聞き召して、惜しませ給ふ事大方ならず、前、檢非違使藤原宗義を大将として、義仲副將たるべき由を仰遣はされ、馬籠の城に籠もる所の、軍兵を過半分かちて、宗義に授け給ひしかば、宗義すなはち、一万余騎を従へて、越後を指して赴く程に、道々なる郷士・野武士、禰宜・巫らに至るまで、馳せ加る者多かりければ、三万余騎になりたり。

かくて宗義は越後に次へ（12ウ・13オ）／＼至りて、義仲に對面して、宮の仰を伝へ、すなはち兼遠に替はりて、本陣を守りけり。この時妹尾兼安は、先に攻め取られたる北国の、城々を取り返さんとて、火打城をうち出でて、越中国に赴き、林・戸樫が城【趙国】を攻むる由、注進越後の陣に聞こえて、救ひを求むる事しきり也。しかれども宗義は、いかなる野心かありけん、これを救ふの心なく、あちこちなる百姓の、娘の艶やかなるを招きて、酌を取らせ、日々に酒盛りして笑ひ樂しみ、なす事もな



(127・13才 覚明、逸る義仲を制する)

くいたづらに、四十余日を送りしかば、義仲は休へかねて、ある日宗義の陣所に赴き、容を正しうして諫むるやう、「兼安越中に討ち入りて、戸樫・林を攻むる事急也。

仲(義仲)「親にも勝る恩義の叔父を、敵に討たれ何処へ引くべきぞ。思へばく口惜しい。

覚(覚明)「お憤りはさる事ながら、甲ひ戦は今日に限らず。まづく宮へ注進状、某案文〇／

〇仕らん。短慮は功をなしませぬぞへ。

(左上)

へ義仲宗義を諫むる所。本文は次に見えたり。

仲(義仲)「戸樫を救はで此所に、逗留は心得がたし。〇／〇日毎の酒宴が敵を滅ぼす、手立てにばしなし、▼「り」カ」ますか。余りといへば懦弱の振る舞ひ。

むね(宗義)「ハテさて何もかも、飲み込んであますはいの。細工は流々仕上げが肝要。□／□ハテ急ぐ事はござらぬてや。

しかるに御辺は味方を救はずして、この所に逗留し、陣中に女子を招きて、酒宴に耽り給ふは何事ぞや。速やかにうち発ちて、戸櫓らを救はずは、加賀・能登・越中は、味方の物にあらじ。油断も事によるものを」と、言はせもあへず宗義は、からくとうち笑ひて、「和君は血氣の若者なれば、敵と戦ふ事こそよくし給はめ。勇は我和君に及ばず。しかれども謀を、帷幕の内に巡らして、勝つ事を、千里の外に決する事は、和君いかでか我らに及ばん。只うち任せておき給へ」と、応へて従ふ氣色なれば、義仲恨み憤りつ、我が陣に立帰りしが、その夜既に思案を決して、次の日越後中大義景、鏑田三郎忠政ら、四五十人の手勢を従へて、又宗義が陣に赴き、再び彼に對面して、出陣を催促せしに、

▲右の下へ／▲左の上より

宗義従ふ氣色なれば、義仲怒りて声を振り立て、「しかる時は大将たりとも、和殿はこれ無益の人なり。■／■この世の暇を取らせんず」と、言ひも終はらず抜き撃ちに、肩先丁と斬り付ければ、宗義は驚きながら、逃げんとするを義仲の、返す刀に頭を撃たれて、叫びも

あへず倒れけり。

宗義が手の者らは、此ありさまに驚き騒ぎて、皆義仲を討たんと競ふを、義仲きつと睨まへて、「宗義かねて逆心あり、さるにより四十余日、この所に逗留して、戸櫓を見殺しにせんと謀れり。我この故に誅したり。汝ら宮に忠を尽くして、平家を滅ぼさんと思はゞ我に従へ。もし宗義が不忠不義に、次へ(13ウ・14オ)／傲はんと思はゞ許しがたし。心を定めて返答せよ」と、呼ば、る声は百千の雷に異ならねば、宗義が士卒は戦き恐れて、兜を脱ぎ鉞を伏せ、皆「従はん」とぞ願ひける。

こ、において義仲は、再び鏑田三郎を、馬籠の城へ遣はして、宗義が不義の趣、且誅伐せし由を、信濃宮に告げ申せしかば、宮は驚き給ふものから、今さら術のあらざれば、すなはち義仲を、惣大将に拜任して、「急ぎ戸櫓らを、救ふべし」とぞ命じ給ひける。

かくて鏑田三郎は、越後の陣に立帰りて、宮の仰を、義仲に伝へしかば、義仲喜び斜めならず、次の日さらに戦発ちして、越中国に討ち入りて、敵の屯に近づく程に、



(13ウ・14オ 義仲、宗義を誅す)

士卒に三日の糧ぞくを持たして、「速やかに、雌雄を決すべし」とぞ触れたりける。

その時覚明は、信濃へ飛脚を遣はして、「越中と越前の国境ぞかひまで、はやく兵糧を出だしおくべし」と言ひ遣はしければ、今井四郎訝りて、由を覚明に□中へ□上より尋ぬるに、覚明答へて「さればとよ。木曾殿勝負を急がんとて、三日の糧を持たし給へど、もし三日の内に勝

皆々「恐れ入たるおん計らひ、ちつとも申分はござりませぬ。

越(越後中太)「宗義の手勢の面々、先非を悔やんで我が君に、従ひ奉らんと願ひます。

仲(義仲)「既に逆意の企てありし、宗義はかくの通り、女子むすめどもは追ひ払ふて、その余の者は罪を赦ゆるさん。イザ出陣の用意々々。

女「月頃日頃かり取られて、酒の相手をいたしたばかり。お許し◆／＼◆あつて親里へ、お返しなされて下さりませ。

ち得ずは、士卒たちまちに飢へに臨まん。某この義を思ふをもて、信濃へ兵糧の用意させしなり」と、言ふに兼平「げにも」と悟りて、その慮おもひりぞ感じける。

◆義仲、兼安と争う

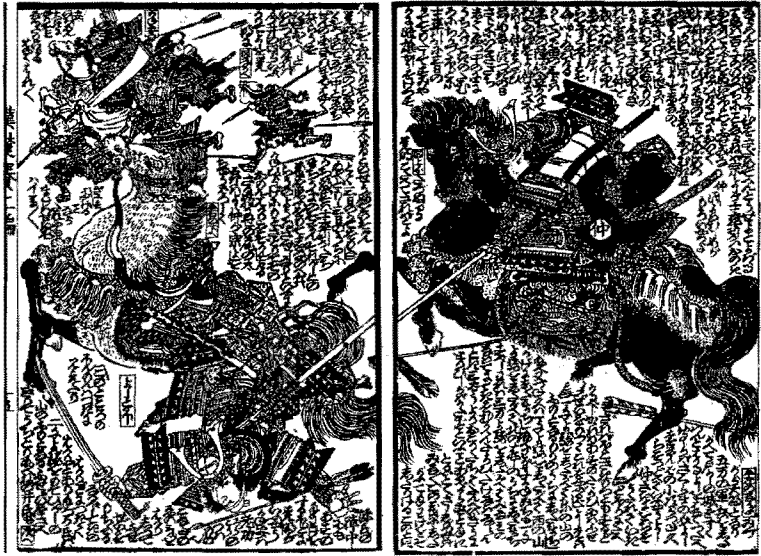
さる程に、妹尾いづなの太郎は義仲が、宗義を誅伐して、

の下の下へ／＼▲左の中よりみぎ自ら大将となり、五万の軍兵を従

へて、戸樫の城を救はんとする由を、早く伝へ聞しかば、桜間さくらまの介良遠、難波なんばの小次郎経久らを集へて言ふやう、「義仲先に叔父を討たれて、憤りに堪へざれば、鋒先最も鋭かるべし。か、れば明日の戦ひには、伏せ勢をもつてこれを破るべし。良遠は千余騎を従へて、東の山の麓なる、森の内に下待ちし給へ。又経久は一千余騎を従へて、西の山陰やまかげに下待ちし給へ。我が子兼通も、一千余騎を従へて、北の林の内に下待ちすべし。我は三万余騎を従へて、南の曠ひらに敵を迎へん。戦ひたけなはならん時、三方より起こり立ちて、短兵急に取り拉がば、勝たずといふ事あるべからず」と、手に取る如く指し示せば、皆々この義に従ふて、手分けをぞしたりける。

この時源氏の陣中にも、明日の手分けをする程に、覚明が言ふやう、「兼安は老功の兵也。此方の鋭気を量り知つて、伏せ勢を用ふるなるべし。敵の謀につきて謀あり。手塚氏は二千余騎をもて、東の山の麓なる伏せ勢を、遮りて討ち取り給へ。根井氏も次へ（14ウ・15オ）／＼二千余騎をもて、山の陰なる、伏せ勢を討ち給へ。又楯氏も二千余騎をもて、北の方なる、伏せ勢を討ちとめ給へ。この余行家・兼平・兼光らの人々は、大将に従つて、兼安が陣を攻め破るべし。巴は遊兵となりて、三千余騎を従へ、弱からん方を助け給へ」と、詳らかにさし示して、既に手分けを定めけり。

○さる程に、次の日の朝まだきより、源平互ひに寄せおふて、入り乱れて戦へども、平家の伏せ勢出であはねば、兼安心怪しみて、しばしためらふ程こそあれ、良遠・経久・兼通らは、楯・根井・手塚らに、とり籠められ討ち散らされて、あちこちの森陰より、大童おぢになりて逃げて来つ、妹尾が本陣になだれかゝりて、上を下へと悶着す。兼安これに驚きて、制し止めんと欲すれば、源氏の軍兵



(14ウ・15才 義仲、桜間介を討つ)

勝つに乗りて、駆け立てく攻むるにぞ、妹尾が本陣いよく乱れて、惣敗軍にぞなりにける。その時義仲は、真つ先に馬を進めて、妹尾を追ふ事しきりなり。あなや只今兼安は、討たれぬべく見えたる処に、引き遅れたる桜間介良遠、義仲の後ろより、鉾をひねつて突かんとす。義仲これを見返りて、「物々しや」と言ふまゝに、手鉾をもつて受けとめ、しばらく挑み戦ふ程に、妹尾は遙かに逃げのびたり。良遠らなまじいに、義仲に突きたてられて、敵ふべくもあらざれば、隙を窺ひ引外して、馬

へこの所の本文は次に見えたり。

義仲「此弱虫めが、もろい奴だ。」

良遠

(左上。敗走する兼安)

安(兼安)「一番大きにやり損なつた。わいらもは

やく走れく。

雑兵「逃げることなら誰にも負けはせぬぞ。ハイ馬

く。

を飛ばして逃げ走るを、義仲は、なほ逃さじとて追ふ程に、乗つたる馬は名にしあふ、碓井の駿足なりければ、たちまちに追ひ付きて、只一鉢に突き落として、雑兵に首を取らせけり。

されば妹尾兼安は三里ばかり、退きて陣を取りしが、この日良遠をはじめとして、討たれたる士卒少なからず。その時兼安は、経久・兼通らに言ふやう、「今日の戦ひに義仲は、十二分の勝ちを得たれば、我が軍兵はいたく



(15ウ 兼安、夜襲に備える)

疲れて、もの、用に立ちがたしと思はん、しからば今宵夜討ちを四へ続く(15ウ)

(かんだ・まさゆき 法学部准教授)

安(兼安)「察する所義仲は、○／○今宵夜討ちに

寄するは必定。各々合点がゆきましたか。

久(経久)「しからば夜討ちを引寄せて、おつとり

こめて討つ手配り。今度はうまくゆきませう。

通(兼通)「今日の戦に良遠を、▲印へ／▲印よ

り討たれし遺恨を晴らすは今宵。皆々出精いたされよ。

雑兵「かしこまりました〜」。